

親子の声を聴き、ともに考える

おもちゃ図書館ペンギン村（嘉手納町水釜）

嘉手納町は本島中部に位置する人口1万3千人あまりの町である。町を流れる比謝川河口では毎年4・5月に鯉のぼりフェスタが開催され、初夏の風物詩として知られている。隣接する北谷町、読谷村、沖縄市とのアクセスもよく、最近では中心地の再開発も進められている。

同町水釜にある「おもちゃ図書館ペンギン村」（比嘉甚夫 主宰）では、障害を持つ子どもと親に対し、子どもの発達についての相談や助言を行っている。

ここではペンギン村の相談活動から、障害児とその親への支援について紹介する。

親子のコミュニケーション、親同士の情報交換の場

「おもちゃ図書館ペンギン村」では、通常のおもちゃ図書館の運営のほかに、発達に遅れのある子どもを抱える親からの相談や親の手による子どもへの機能訓練が行われている。

活動は金・日を除く週5日行われる。午後になると子ども連れの母親たちがペンギン村に集まる。現在、全体で13組の親子と2人の成人が利用している。

ペンギン村を主宰する比嘉さんは自らも障害をもっており、ご自身のこれまでの経験を活かして、親に子どもの発達についての相談・助言を行っている。

脳性まひなどが原因で、身体をスムーズに動かせなかったり、発達に遅れのある子どもやその親の声を聴いて、機能訓練等についてアドバイス。親はその責任において子どもたちに「ずりばい」や寝返りといった体操や、アテトーゼと呼ばれる不随意運動を和らげるマッサージを行っている。これらは、呼吸や声かけなどにも注意しながら同じ動作を繰り返す。親子一緒に行うため、自然とスキンシップやコミュニケーションを図ることができ、子どもたちの心身の発達をバランスよく促すことができるという。

この他にも、ペンギン村は他の児童やその親同士が情報交換などを行う場ともなっている。

おもちゃ図書館の利用は無料であるが、機能訓練や相談については別途会費を徴収し、運営に役立てている。



▲ペンギン村では自然と親子のスキンシップやコミュニケーションを図ることができる。

親からの相談に耳を傾けて ～これまで延べ 100 組以上が利用

「おもちゃ図書館」とは、障害のある子ども達におもちゃの素晴らしさと遊びの楽しさを」との願いから始まったボランティア活動で、現在では全国に 400 以上のおもちゃ図書館が設置され、それぞれが活動している。こうした中、ペンギン村は（財）日本おもちゃ図書館財団の助成や支援を受け、平成元年にオープンした。

ペンギン村で相談・助言を始めるようになったのは平成 5 年、比嘉さんのもとに重度の障害をもつ子の親から相談が寄せられたのがきっかけとなった。呼吸停止の発作があるという児童の様子を見て比嘉さんは、「これは障害の合併症ではなく、座る姿勢をとらなかつたために、十分に横隔膜が育っていないから。」とアドバイスを送った。その後、この児童は見違えるほどに状態が改善し、4ヶ月ほどで発作を起こさなくなった。これを機に、障害児を抱える親へ正しい情報を的確に伝えることの重要性を痛感。現在の活動をスタートさせた。

今では本島中部各地から親子が通うようになった。開始から現在まで通算すると延べ 100 組以上の親子がペンギン村を利用しているという。

周囲に支えられて、そして支え合って

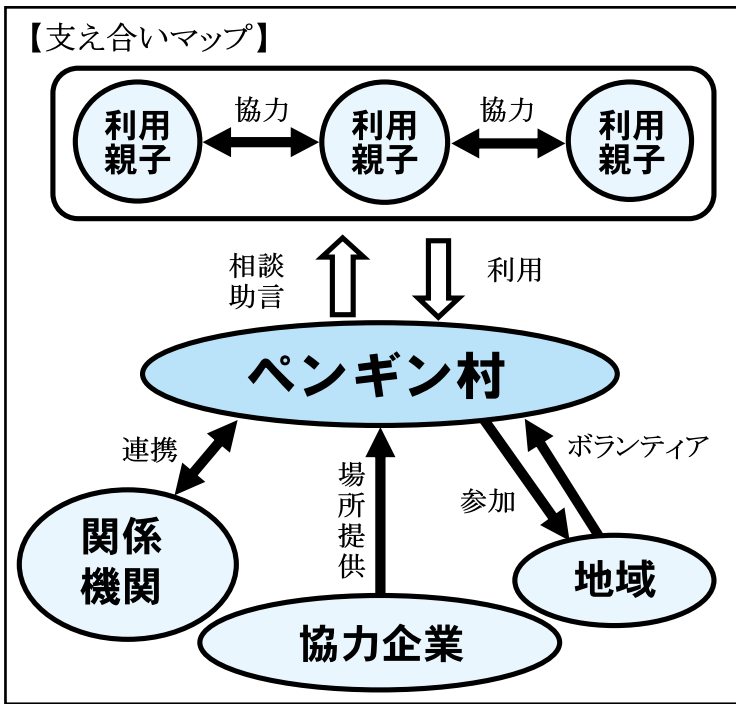
ペンギン村は、全国組織である「おもちゃ図書館全国連絡会」や、県内 10ヶ所の他のおもちゃ図書館とも情報交換を目指しながら活動を行っている。

また、嘉手納町社協から助成金の配分を受けているほか、町のお祭りへの参加などを通して、地域との関わり合いを行っている。

ペンギン村の運営には、周囲のサポートが大きな力となっている。

ペンギン村の活動スペースは、比嘉さんの友人らが経営する事業所に間借しているほか、大家

さんも色々と便宜を図ってくれて、強い味方になっている。協力者の一人、奥間トシ子さんは開設当初から運営に協力してもらっており、毎日ボランティアで活動に参加し、親子と接している。また、利用している親も会費の徴収などの役割を分担し合いながら、みんな活動を支え合っている。



皆で子どもの成長を見守り、喜ぶ

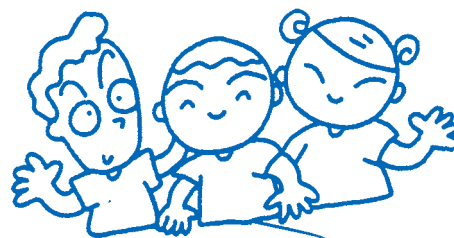
2年前からペンギン村に通う、添盛桂大（けいた）くん（6歳）とその母親の奈利代（なりよ）さんは、同じ児童デイサービスを利用する親からの紹介でペンギン村の活動を知った。奈利代さんは「ここに通うようになっておしゃべりがうまくなったり、お座りができるようになりました。」と桂大君の変化について話す。



▲お誕生日会の様子。子どもたちの成長はみんなの喜び。

比嘉さんは、「脳の神経ネットワークを増やすことによって、本来持つ能力を補うことができる。だから、なるべく早く訓練を始めるほうが良い」と話す。

利用する親子は毎週ペンギン村で顔を合わせているので、一人ひとりの子どもの様子を皆で見守っている。そして、「あれができるようになったね」と子どもの発達・成長を皆で喜び、お互いの励みにしている。



療育のための情報 ネットワークを生かして周知を

活動を通して感じたことについて、比嘉さんは「もっと親に色々な情報が届けられるような仕組みが必要だ」と指摘する。出生後なるべく早い段階から療育のための訓練やサポートを開始しなくてはならないが、そのような必要な情報が、親子に届けられる量が少ないという。「母子健康推進員」などの行政がもつ仕組みやネットワークを生かしての周知が求められる。

有資格者とのかかわりを持ちマンパワーの充実を図りたい

ペンギン村では、現在の活動を継続させながら、学齢期を終えた障害児や成人を迎えた障害者がパソコンなどの技術を活かして働ける作業所の立ち上げも模索している。

そのためにも、「これからは、医師などの有資格者と関わりあいを持ち、マンパワーを充実させながら進めていきたい」と比嘉さんは今後の展望を語った。

ペンギン村の取り組みは、広域ながらも「療育」というテーマに対して皆で支え合っている好例である。また一方では、身近な地域における母子の相談体制のさらなる充実が求められていることも示してくれている。

団地における地域活動で子どもたちの居場所づくり 比屋根団地子ども育成会・学習会&昼食サービス（沖縄市比屋根）

沖縄市にある県営比屋根団地は、市東部に位置し、現在 200 世帯が入居している。母子世帯や共働き世帯が多く、放課後や夏休みなどにおける児童が安心して過ごせる環境が求められる中、団地内外の住民で構成される「比屋根団地子ども育成会」（北本律子会長）によって子どもの居場所づくりに向けた取り組みが行われている。

ここでは、団地を一つの地域と捉え、集合住宅の特性をプラスに生かしながら展開される住民支え合い活動を紹介する。

集会所が子どもたちの居場所に 学習会はほぼ毎日開催

団地内外の住民のボランティアで組織される「比屋根団地子ども育成会」では、地域の子どもの居場所づくりと交流を目的に、学習会や昼食サービスを実施している。

学習会は日常的な活動として、日曜・祝祭日をのぞくほぼ毎日開かれている。学校を終えた児童が放課後に団地内にある集会所に立ち寄り、そ



▲学習会では上級生が下級生に勉強を教える姿も見られる。

こで宿題をしたり、本を読んだりして過ごすことができる。ボランティアは学習のサポートに入り、計算や漢字の書き取りなどをする児童を見守っている。

昼食サービスとは、夏休みや春休みなどの長期休暇に、地域の子どもたちへ昼食を提供するサービスで、日中、親が仕事のために留守にしがちな家庭にとって心強い味方となっている。昼食サービスは事前の申込みが必要で、毎回 30 名程度が利用している。月 4 回の頻度で開催されるこのサービスは、食材の調達から調理までをボランティアが手分けして行っている。

こうした活動は団地内にある集会所を拠点として展開されているため、子どもたちも気軽に足を運ぶことができ、親にとっても安心して利用させることができるメリットがある。また、子どもたちと地域住民との交流の機会も自然と増え、放課後の居場所づくりや青少年の健全育成にもつながっている。

／ きっかけは子育てサークル やがて地域活動に発展

活動の開始はおよそ10年前にさかのぼる。当時から比屋根団地を担当する民生委員だった北本律子さんは、高齢者宅の緊急通報システムの報せにより安否確認のため現場に急行し、高齢者の一命を取り留めるという体験をした。この時、地域を支える民生委員の使命の重さを改めて痛感し、以来、積極的に地域に関わるようになっていった。



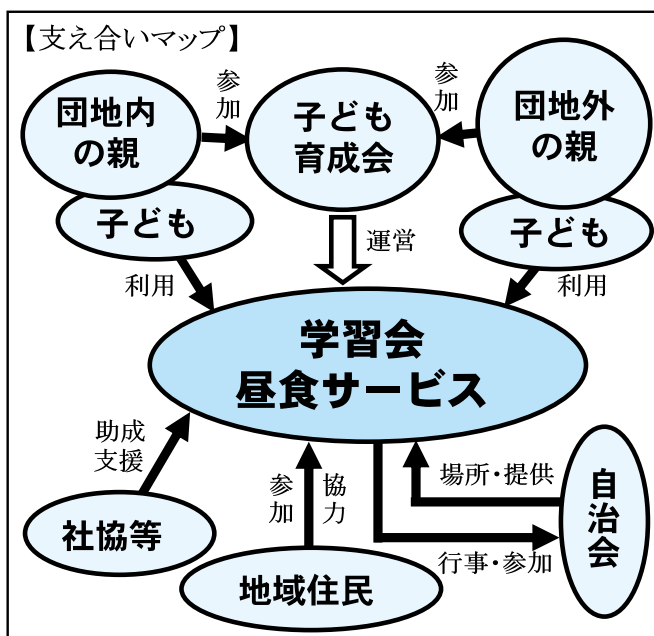
▲うれしそうに箸を伸ばす児童

こうした中、平成8年に団地自治会の事務員でもあった北本さんは、集会所の施設を利用した子育てサークルを立ち上げる。

これは沖縄市の「ゆいまーる事業」と呼ばれる独自事業の助成を受けて実施したもので、毎週木曜日計25回の活動を行った。これがきっかけとなり、やがて現在のようなボランティア活動に発展する。地域住民が集まることによって、活動に協力してくれるボランティアも自然と増え、また、地域から色々な情報が寄せられるようになった。

昼食サービスもこうした情報交換から生まれた。団地では母子世帯が約30%を占め、共働き世帯も多い。夏休みなどの長期休暇になると学校給食がないため、各家庭で昼食を用意しなければならないが、準備する時間がなかったり、準備しても、子どもだけだと料理を温め直す際の火の元の取り扱いが心配となる。多くの場合、子どもたちに小遣いを渡して、弁当で済ませようとするのであるが、子どもたちはそのお金でお菓子やジュースを買ったり、ゲームに使ったりといった現状があることが分かった。

こうした現状を踏まえて、子ども育成会では自治会へ昼食サービスの実施を提案し、そ



の承認を得て、活動をスタートさせた。利用する親子双方から喜ばれたサービスであったが、一部からはボランティアに対する無理解や風当たりもあった。そのため、活動を一時取り止めた時期もあったが、周りからの応援を受け、「自分たちは間違ったことをしていない。」と信じて活動を再開した。

その後、市社協もこの活動を支援し、全国社会福祉協議会や国の補助事業の指定を受けるなどしながら、現在に至っている。

子どもたちを名前呼びかけることができるように

自治会の集会所というアクセスの良さから、毎日行われている学習会には地域の方々が頻繁に訪れる。活動に関わる中で自然と子どもたちの名前を覚えることができ、声かけやあいさつが気軽にできるようになるなどの効果も生まれている。

また、子どもたちは自治会の行事にも積極的に参加するなど、地域との交流の機会を多く設けている。団地の外の住民や子どもたちへも門戸を広げ、地域を限定することないスタイルもその特徴である。

一番の喜びは叱れること?! 明るさが長続きの秘訣

ボランティアとして子どもたちの勉強のサポートにあたる平良貴美さんに、活動をしていく中での一番の喜びについて尋ねると、「読み聞かせや参観日に学校に行った時、たくさん子どもたちが駆け寄って声をかけてくれることです。」と話す。同じくボランティアの川満るみ子さんは「子どもたちを叱れることじゃないですかねー。」と冗談を言った。色々苦勞も多かったと聞くが、それでも10



年近く活動が持続できているのは、こうしたボランティアの明るい人柄によるものだと感じた。

小学校6年生の平良優也くんに昼食サービスのメニューについて聞いてみると、「カレーライスが好き」と答えた。学習会に参加している児童の一人は、ここで過ごす時間について「楽しい」とはにかみながら答えてくれた。

▲お皿に料理を盛り付ける。子どもたちが喜ぶ様子がボランティアのやりがい。

団地だからこそ、生活課題を共有しやすい

子ども育成会の北本律子さんは、これまでの活動を振り返り、「ボランティアの力、地域の力に支えられて今日まで続けてこられました。本当に感謝しています。」と話した。団地という環境を一つの地域と捉えることで、いろんな可能性を感じるという。近隣住民同士が無関心になりがちといわれる集合住宅であるが、生活課題を共有しやすい分、きっかけがあれば支え合い活動が生まれることもできる。

比屋根団地子ども育成会の活動は大いに参考になる事例といえるだろう。

利用者の声を大切に 豊富なメニューで地域にも展開 南風原町兼城ゆいまーる会（南風原町兼城）

南風原町では、小地域福祉ネットワーク活動の一環として各自治会の公民館を拠点に高齢者を対象としたミニデイサービス（以下、ミニデイと表記）や子育て中の親子を対象とした子育てサロンを実施している。その一つ、兼城地区では、年間を通じて様々な活動を行っている。

ここでは、兼城ゆいまーる会が行うミニデイにおける多様な活動メニューの実施を中心に地域への展開について紹介する。

月2回のミニデイを開催 子育てサロンにも注力

兼城地区では公民館へ地域の高齢者が集うミニデイや子育て中の親子同士が交流し情報交換ができる場として子育てサロンが行われている。これを運営するのは、地域の民生委員や住民ボランティアで組織される「兼城ゆいまーる会」（大城茂会長）である。

ゆいまーる会は平成5年に発足。南風原町の中でも先駆けて小地域福祉ネットワーク活動に取り組んだ団体である。

現在、町社協が実施する「生きがい活動支援通所事業」とあわせ、ゆいまーる会独自でミニデイを行い、毎月第3・第4水曜日の2回を定期的な活動日としている。

また、平成15年9月から近くの保育園の協力を得ながら子育てサロンにも力を入れている。



▲毎年行われる体力測定。健康増進・介護予防の効果も。

バリエーション豊かな内容

ゆいまーる会が行うミニデイで特筆すべきは、その内容の多様さにある（詳細は右表のとおり）。

今年度の活動計画を見ただけでも、グラウンドゴルフにそば作り、講話、手工芸、ピクニックなど幅広い。また、地域の小学校や保育園へ出向いての交流会や、ひとり暮らし高齢者世帯への友愛訪問活動を実施するなど地域社会とのつながりを大切にしている。さらに、毎年1回の体力測定では、握力や前屈、歩行など5種類のメニューを計測し、自分の体力水準のチェックに役立てている。これは、介護予防や健康増進にもつながっている。

利用者の声を大切に～バランスの取れた活動計画づくり

このように年間を通じ多彩なメニューが用意されているゆいまーる会の活動であるが、これらは、毎年度末に利用者へアンケートを行い、「こんなことをやりたい」という意見を反映させながら実現したものだ。

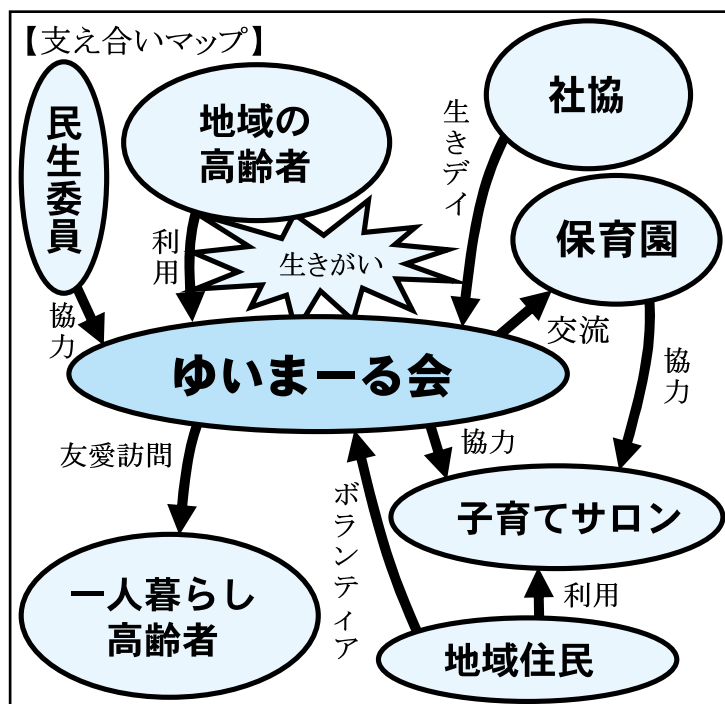
ともすれば、ワンパターンの内容に終始しがちなミニデイであるが、利用者の希望する内容は多様であるはずである。ミニデイを運営する側は、そのニーズに真摯に対応していくことが求められる。また、適度な運動を取り入れたり、文化・教養に触れる機会を設けるなど、バランスの取れた活動計画の工夫も必要となる。兼城ゆいまーる会の取り組みは、その好例と言えよう。

このように、プログラムを工夫することで、利用者のマンネリ化を防ぐことはもちろん、新たな利用者の開拓にも期待ができる。あわせて運営するボランティアも一緒に楽しくするという相乗効果も期待される。



地域に出かけていくことで、利用者も地域社会へ貢献

小学校等での世代間交流や友愛訪問、町内の他地域の団体との交流会など、会場である公民館にこだわらない、地域へ目を向けた活動メニューも特徴の一つである。こうした



活動を通して、高齢者の社会参加を促すことで、サービスを受けるという立場から、高齢者自らが地域へ貢献する機会を提供することにつながっている。

また、住民も講話の講師や手工芸の指導、交流会の運営など様々な場面でボランティアとして参加でき、子育てサロンの実施で若い世代も地域と密接に関わることができ、地域全体で福祉活動に取り組む土壌を築いている。

相互扶助を大切にこれからも活動が続けたい

取材に訪れた日はちょうど、年1回の体力測定の日だった。楽しそうに体力測定に参加する利用者を見て、ゆいまーる会の活動に関わる地元民生委員の松田直子さんは「皆さんの喜ぶ表情が本当にいきいきしているでしょ。楽しんでもらうことで私たちもとてもうれしいんですよ。」と話した。



利用者で元会長の山城清忠さん(81歳)は、ゆいまーる会が今年 ▲プログラムの最後はみんなで談笑。よもやま話に花を咲かせる。の県社会福祉大会で表彰を受けたことを知り、「相互扶助を大切にこれまでやってきた。これからもみんなで活動을続けて、総理大臣表彰を目指そうではないですか。」とうれしそうに語った。

子育てサロンも実施 みんなが喜ぶ活動に

会長の大城茂さんにこれからの活動の展望について話をうかがった。大城さんは、「これまで町社協や字から大きな支援を受けてやってきた。ボランティアと共に、みんなが喜んでもらえる活動にしていきたい。」と抱負を語る。

現在、県内各地で公民館等を活用したミニデイや子育てサロンが行われている。この兼城ゆいまーる会の取り組みは、マンネリ化や地域展開に悩む多くの関係者にとって参考になる事例であろう。今後さらに小地域福祉ネットワーク活動の裾野を拡げ、支援を必要としている方々への見守り活動や生活支援活動への発展的な活動が期待される。

兼城ゆいまーる会年間活動計画

4月	グランドゴルフ 講話（兼城の生い立ちについて）	10月	手工芸 社会見学
5月	交流会（字宮城はごろも会） そば作り	11月	体力測定 町交流会（小地域福祉ネットワーク）
6月	講話（綱曳きの由来について） 交流会（南風原小学校）	12月	忘年会 民謡講話・カラオケ
7月	室内レク・カラオケ 交流会（ていーだ保育園）	1月	さくら見学 交流会（兼城保育園）
8月	講話（食について） 手工芸	2月	室内レク・カラオケ グランドゴルフ
9月	手工芸 友愛訪問（在宅並びに入院者）	3月	カラオケ・室内レク グランドゴルフ

気づきを築く、福祉の目と芽（3） ～趣味を活かしたボランティア活動～

地域福祉活動に参加したいと考えている住民は意外と多いものです。趣味を活かしたボランティア活動の機会を増やすことで、住民の地域福祉活動への参加機会も増えることが期待されます。

【地域福祉活動と趣味を結びつける視点を】

地域福祉活動では、高齢者を対象としたミニデイサービスや子育てサロン、環境美化、友愛訪問やあいさつ運動などが行われています。一方、趣味は人それぞれでバリエーションも豊かです。福祉活動と趣味を結び付ける視点をもつことが大切となります。

【文化・芸術系の趣味を活かして】

例えば、音楽が趣味で楽器が演奏できるのであれば、ミニデイのレクリエーションで披露したり、演奏指導をしたりできます。将棋やカードゲームが得意であれば、利用者の対戦相手になってあげることも可能でしょう。園芸が趣味ということであれば、園芸指導や花いっぱい活動に取り入れることができます。絵やイラストが上手い方には、立看板やポスター制作をお願いすると良いでしょう。このほかにも、書道や手工芸、郷土料理、アロマテラピーなどいろんな趣味を活かして活動に加わることができます。

【体育系の趣味を活かして】

文化系の趣味は苦手だが体を動かすことが好きという方は、学童クラブなどで児童の遊び相手になったり、介護予防プログラムのアシスタントなどが挙げられます。また、ジョギングやウォーキングを兼ねた地域の見回り活動なども可能でしょう。福祉団体ではスポーツ行事を主催することもあるので、そうした機会に参加するのも良いでしょう。

【バリエーション豊かな活動に】

自分がやっていて楽しいこと、得意なことが趣味です。趣味をボランティア活動に活かすことで、「ボランティアは楽しい」という主体性につながるほか、回りから認めもらうことで、達成感を得ることもできます。「ボランティアをしたい」と考えている方は、趣味を活かしたボランティア活動を、「ボランティアを集めたい」と考えている方は趣味を活かせるプログラムを考えてみてはいかがでしょうか。

